

2020年10月11日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

レビ記 19 : 18

ルカによる福音書 10 : 25～37

「善いサマリア人」

＜敵対する律法の専門家＞

イエスさまは、まことの人となられた、神の御子です。神さまの御心を示すために、神さまの救いのご計画を実現するために、救い主としてこの世に来られた方です。

イエスさまはこれからエルサレムへ向かおうとしておられます。十字架に架かり、復活し、そして天に上げられるためです。すべての人の罪を担い、裁きの死を引き受け、わたしたちが罪を赦され、神さまの許に立ち帰るため。わたしたちが滅びの死から救われて、神さまの恵みのご支配に生きる者となり、永遠の命を受け、復活に与るためです。

イエスさまは、このように天の父なる神さまが、わたしたちを救おうと思っておられること、愛しておられること、憐れんでおられることを示して下さいます。

この神さまのご計画は、人間の知識や賢さでは知ることが出来ません。自分の力や知識で救いを得ようとする者は、それを知ることが出来ません。神さまのみ言葉によってのみ、イエスさまが示して下さいることによってのみ、神さまのことを知ることが出来るのです。

前回の聖書箇所 21 節に語られていたように、幼子のように、何も持たず、何も出来ず、ただ与えられるものを受け取ることにしか出来ないような者にこそ、神さまの救いは示されず。恵みは、救いは、ただ神さまから与えられるものであり、わたしたちはそれを受け取ることにしか出来ないのです。

そして、イエスさまは、ご自分の弟子たちに向かって、「あなたがたの目を見ているものを見る目は幸いだ」と言われました。わたしを見ている、あなたたちの目は幸いだ。神の救いの知らせを聞くあなたがたの耳。救い主であるわたしと出会っているあなたがたの目。救いの出来事を知るあなたがたは、まことに幸いだ。」そう言われたのです。

今日の聖書箇所は、その後の出来事です。今日は、この幸いだ、と言われた、イエスさまに救いの恵みを示された弟子たちとは反対に、イエスさまに敵対する人が登場します。

25 節には、「ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った」とあります。律法の専門家。21 節で言われていた、「知恵ある者や賢い者」の代表のような存在です。

彼は、イエスさまを試そうとした。テストした。質問の答えによって、イエスがどういう者か見極めてやろう。評価して、合格か、ダメなやつか、判断してやろう。そういった悪意を持って質問をしたのです。ここには、本当に神さまのことを知りたい、イエスさまの話を聞きたい、という救いを求める気持ちはみじんもありません。

律法の専門家は試して言いました。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」永遠の命を受け継ぐ、というのは、神さまの救いに与る、という意味です。何をしたら、神さまの救いに与ることができるでしょうか。

さて、ここからイエスさまのユーモアあるやり取りが語られます。

<質問返し>

イエスさまは、この質問に対して、質問で返して来られました。これは質問した側はとても嫌な気持ちになるものです。イエスさまの質問はこうです。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」

このイエスさまの問いが、今日の物語全体の中心です。律法、つまり、神さまのみ言葉、神さまがわたしたちに望んでおられること。それは何とやっているか。あなたは、どう思っているのか。そう聞かれたのです。

律法の専門家はこう答えました。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」

これは実際、見事な答えです。たくさんある神さまの律法を要約すると、つまり、あなたの神である主を愛すること。また、隣人を自分のように愛すること。これを神さまは語っておられます。わたしたちに求めておられます。律法の専門家は、専門家らしく実に的確に答えたのです。

すると、イエスさまは言われました。「正しい答えだ。」「合格です。」

最初は律法の専門家がイエスさまを試して、テストして評価してやろう、と思っていたのに、いつの間にか自分が問い返され、イエスさまに評価されてしまったのです。

さらにイエスさまはこう言われました。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

これは、神を愛し、隣人を愛するという行為を実行することによって救いが与えられる、という意味ではありません。ここで、イエスさまがこんな言い方をされたのは、ちょっとした皮肉なんだと思います。あなたは正しい答えを言えるじゃないか。知っているじゃないか。じゃあ、そうすれば良いのに、なぜ質問してきたのか、という感じです。試そうという思惑で質問したことを見破られているのです。

だから、律法の専門家は、自分を正当化したくなった。弁解して、いや、聞きたいのはここなんですよ、という感じでこう言いました。「では、わたしの隣人とはだれですか。」

これは、彼が自分を正当化するための質問でした。しかし実際、彼はこの神さまのみ言葉に従うことの難しさを、具体的に何をどうすれば良いのかということの疑問を、本当に感じていたのかも知れません。神さまを愛すること。隣人を自分のように愛すること。

神さまを愛する、ということは、律法を守ること。御言葉に従うこと。礼拝を忠実に守り、

献げ物をし、掟を守って生活すること。もしかしたら、これは出来ている、と思っていたかも知れません。でも、隣人を愛するとは。わたしが愛すべき隣人は誰だろう。誰に親切にすれば、誰を大切にすれば、律法をちゃんと行ったことになるのだろう。

隣人とは誰か。これは、わたしたちもまた、素朴に抱く疑問ではないかと思います。そこで、イエスさまがお語り下さったのが、善いサマリア人の物語なのです。

<善いサマリア人のたとえ>

さて、この物語は、何も難しいところはありません。とても分かりやすいお話です。

ある人が、エルサレムからエリコへ下っていた。エルサレムから来ているから、この人はユダヤ人でしょう。そしてエリコというのは、強盗が出るので有名な難所でした。当時、このお話を聞いている人にとっては、エリコで追いはぎに遭った、というのは、大阪でひったくりに遭った、という位、あるあるの事件でした。

それで、このユダヤ人は半殺しにされてしまいました。身ぐるみ剥がされ、殴られ、お金もなくなり、ケガもして、動けなくなって倒れていた。

それを横目に通り過ぎて行った人が二人います。祭司とレビ人です。祭司は神殿に仕えて神さまへの献げ物などの祭儀を司る、ユダヤ人が尊敬し、従うべき人物です。またレビ人は、ユダヤ人の民族の中から神さまに仕えるために選ばれた部族で、彼らもまたユダヤ人の営みの中心にいる人々でした。そんな、ユダヤ人でも特別な立場で、しかも律法で神さまが語られていることを実行し、担っていく中心になる人々が、同胞のユダヤ人が半殺しにされているのを見て、道の向こう側を歩いて行ってしまったのです。

もしかしたら、わたしたちは、この祭司やレビ人を、大変な冷血漢や、とんでもない非道な人、と思うかも知れません。

しかしこれもまた、聞いている人がユダヤ人なら、ましてや律法の専門家なら、仕方ないかもな、と思うことでした。何故なら、律法では死体に触れると汚れるとされていたからです。もう半殺しになっていたら、介抱している内に死んでしまうかも知れません。祭司やレビ人は、特に民のために重要な働きを担っている人たちであり、ここで自分が汚れるリスクを負って助けるか、与えられている重要な義務を全うするためにリスクを避けるか、そういう選択だったのです。

そうすると、これならわたしたちにも思い当たる場面があるかも知れません。倒れている人、困っている人がいれば、助けてあげるのは当然のことだと分かっている。それは人としての自然な心の動きでしょう。でも、関わったら面倒に巻き込まれるかも、という状況だったら、関わるのを避けたい、という思いが出て来てしまうかも知れません。

数年前、中国で事故に遭って倒れている人を、通り過ぎる人が誰も助けず放置している映像が話題となりました。助けに行ったら、助けた人がその人に何かをしたと思われて訴えられる、というのです。多くの人々は、自分の安全を守るために、リスクを避けるために、傷

ついている人を見捨てました。

わたしたちも、誰かを助けたいと思っても、それでもし自分がリスクを負うようなら、面倒なことになりそうなら、遠回りして避けようとしてしまうかも知れません。

さて、この祭司とレビ人と対照的だったのがサマリア人です。サマリア人は、行なったことは勿論、その立場も、祭司やレビ人と正反対です。以前、9:51以下で、サマリア人の村に入ろうとしてイエスさま一行が拒否された場面がありました。ユダヤ人は、サマリア人を純粋な民族ではないからと言って軽蔑し、互いに憎しみ合う関係になっていたのです。

しかし、このサマリア人は、半殺しにされているユダヤ人である「その人を見て憐れに思った」とあります。そして、手当てをし、宿屋に連れて行き、介抱してくれるように頼んだのです。

サマリア人は、たまたま、行きがかりに倒れている人を見つけて、傷つき、苦しんでいる様子を見て、ただ可哀想に思い、憐れに思い、助けてあげたのです。でもそれは、民族間の憎しみや、感情を超えて、一人の人間としてそこにいる相手を見つめ、心を動かされ、その思いに従ってなすべきことをした、ということです。

<隣人になる>

さて、このようなたとえを語られて、イエスさまは質問されました。「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

律法の専門家は答えました。「その人を助けた人です。」

イエスさまは、最初に律法の専門家が聞いた質問の内容を、変えておられます。

律法の専門家が聞いたのは、「わたしの隣人とはだれですか」という質問でした。わたしが愛すべき人はだれですか。わたしはだれを愛すれば、隣人を愛したことになりますか。どの隣人を愛すれば、律法を行なったことになりますか。律法の専門家は、初めから自分が愛すべき対象を絞り、だれが自分の隣人かを決めようとしていました。そして、その人をこなせば、律法が全うできると。

でも、イエスさまは、愛すべき隣人がだれか、ではなく、だれが隣人になったか、を教えられました。そして、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。

あなたが、隣人になりなさい。何かの条件があるから愛するのではなく、必要としている人、苦しみや弱さにある人の傍らに行って、あなたから愛し、あなたがその人の隣人になりなさい。それが、隣人を愛するということだ、と教えられたのです。

「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」神さまのみ言葉を本当に正しく読むとは、そういうことなのです。「神を愛すること。隣人を自分のように愛すること」。この神さまの求めておられる愛が、本当にどういうものであるかを知ること。字面だけ正しいことを言えるのでなく、どう生きることを望んでおられるか、その御心を知り、実際そのように生きることなのです。イエスさまはそれを教えて下さいました。

汚れた者にならないために、律法に書いてある通り、死体に触れないでおこう、助けるのもやめておこう、とすることは、律法においては清さを保っているかも知れませんが、神さまの御心ではありません。

わたしが愛すべき人はだれだ、と決めて、愛すべき対象を制限して、この人を愛すれば、神さまの律法をクリアできる、救いに近付ける、と考えるのも、まことに自分勝手な愛であり、神さまの御心ではありません。

でも、わたしたちは、自分の力で、自分の努力で、そのように神さまを愛し、隣人を愛し、救いをいただける者になることは出来ません。わたしたちは、まず神さまから救いをいただいて、憐れみをいただいて、「あなたたちは幸いだ」と言われる者となって、はじめてこの神さまの御心を知り、そのように生きる者とされていくのです。

<幸いな者として>

今日登場するサマリア人は、33 節のところで「その人を見て憐れに思い」とあります。この「憐れ」という言葉は、ギリシア語では腹わたが痛んで振れるような思いを意味します。そして、これほどに深い憐れみの表現は、ルカによる福音書では 7:11 で、一人息子を失ったやもめをイエスさまが憐れまれた時、そして少し先の 15 章の放蕩息子のたとえで、ボロボロになって帰ってきた息子を見た父親が「憐れに思い」というところで使われています。

この「憐れみ」は、まず神さまが、イエスさまが、わたしたちに対して向けて下さった「憐れみ」の心です。神さまを愛することが出来ない。隣人を愛することも出来ない。罪に捕らわれ、悲惨さの中でもがき、互いに傷つけあったり、見捨てたり、見捨てられたり、そんな悩み苦しみの中で、死にかかっていたわたしたちです。あのエリコで半殺しにされて倒れていたのは、人生で傷つき、苦しみ、倒れていたわたしたちです。

それを神さまは見て、腹わたが痛むほどに憐れんで下さった。居ても立っても居られなくなられた。そして、御子であるイエスさまが駆け寄って下さり、わたしたちのところに来て下さった。そしてご自分の命を犠牲にしてまでも、わたしたちを救い出して下さったのです。

まず、憐れまれ、愛され、死にかかっていたのを助けられたのは、わたしたち一人一人です。最初に、わたしたちの隣人になって下さったのは、イエスさまご自身です。わたしたちはまず、自分自身が愛された者、深く憐れんでいただいた者であることを知りたいのです。

その恵みに生きるわたしたちに、神さまは、わたしたちもまた「憐れみの心」に生きることを求めておられるのです。祭司も、レビ人も、サマリア人も、倒れている人も、このわたしも、すべての人を愛し、心から深く憐れんでおられる神さまの思いを知り、その憐れみに生かされているわたしたちもまた、苦しみ、傷ついている目の前の人の隣人となることを望んでおられるのです。神さまの愛を知り、神さまを愛することと、神さまの愛を知り、隣人を愛することは、一つのことです。

でも、このサマリア人のたとえのように、わたしが誰かの隣人となることは、とても難しいことのように思えます。そうすることの出来ていない、自分を裁く物語にも聞こえます。

でも、何か愛の大事業をせよとか、死にかかっている人が回復して、社会復帰して、元気になるまで責任持てとか、すべての困っている人を、あなたが全部助けに生きなさい、と言われていたのではありません。出来ないことをやれと言われていたのではありません。

今日のサマリア人だって、倒れている人を探して助けに行ったわけではなく、たまたま自分の旅の道中で倒れている人を見つただけです。それに、介抱してあげたけれど、宿屋の主人に足りなかったら後から支払う約束をして、宿屋で二日分の宿泊費を払って、後のことは託して、また自分の旅に戻って行きました。宿代を払ってあげるのは相当親切だし、懐は少し痛いですが、目の前の人を憐れんで、自分が出来る精一杯のことを、出来る範囲ですてあげた。それで良いのです。

わたしたちに求められているのは、神さまが示して下さった、わたしたちに対する神さまの憐れみの御心を知ること。そして、その憐れみをいただいて生かされているわたしたちもまた、その憐れみの思いを持って、愛をもって、与えられた人々に接していくことです。

この物語は、イエスさまが弟子たちに対して、「わたしと出会っているあなたたち、神の救いを知らされているあなたたち、天に名が書き記されているあなたたち、神と共に生きる者とされているあなたたちは幸いです。」そう宣言して下さった後に、語られています。

この憐れみに生きることが出来るのは、わたしたちがだれかの隣人になるべく、生きなさい、と言って頂けるのは、わたしたちが、このイエスさまの救いに与り、神さまの憐れみに生かされ、神さまの愛を知る幸いな者とされているからなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが深い憐れみの心で、罪と死の中に倒れているわたしたちを見捨てず、救いのためにイエスさまを遣わして下さい。イエスさまが、わたしたちの側に来て下さり、癒して下さい、慰めて下さり、ご自分の命を献げてまでわたしたちを救って下さったことを感謝いたします。あなたの救いの恵みを知らされ、わたしたちはまことに幸いです。

あなたの深い憐れみに生かされた者として。あなたが共にいて下さる幸いに生きる者として。わたしたちもまた、少しずつでも、あなたの憐れみの心を持つ者となっていくことができますように。そして、行って、わたしが隣人となり、愛する者となることができますように。わたしたちに力を、導きを、愛を、憐れみの心を、与えて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン